海月骨なし

山波太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
海月骨なし

【Ｎコード】
Ｎ１７１６Ｏ

【作者名】
山波太郎

【あらすじ】
なぜクラゲの骨がないのかという昔話を自分なりに書きました。習作です。

猿の肝が食べたいと竜王の妃が言いだしたのは、臨月に入ってからのことであった。
極めて唐突なことである。
「猿……？」竜王は訊いた。「猿って、あれか？　あの、陸にいて毛が生えている……」
「陸にいる生き物は大抵が毛の生えているもの、らしいわね」妃が呆れ顔で言った。
竜王はそんな妃を前にして、ふたつめを次げないでいた。
猿という生物を、竜王は確かに知っている。彼の統べる領域は海、そして彼の住む世界は深海であるが、そこは王を名乗るもの。遠い外界のことも、ある程度は精通していなければならない。知っていても何ら不思議はない。それはその妃も同じである。
が、それはあくまで知識としてのことなのだ。文献にそうと書いてあるだけで、それ以外、それ以上のことは何も知らない。
「陸にいて、毛が生えていて……」
竜王は今言ったこと以外に、何が文献に書かれていたのかを懸命に思いだそうとする。文献を開くという手間をしなかったのは、それほどのことでもないということと、彼のささいなプライドのためだった。
「毛が生えていて……」妃は促すように言った。「それから……？」
「それから……」竜王はうなった。「そう……そう、尻が赤い！　そうだろう？」
竜王はすっきりしたのだろう。得意そうな顔を作ってみせた。
妃もそれを聞いて、満足そうな笑みを浮かべる。
「ええ、私の思っているものとおなじ」
「それは良かった。……で、猿がどうかしたって？」
振り出しに戻る。

「だから、猿の肝がほしいの」
「どうして？」竜王は怪訝な顔を作る。
すっかりと最初のことを忘れてしまっている。
「だから、食べたいのよ」妃は言った。
「どうして？」
「どうしても」瞳を閉じて妃は答えた。
答えになどなっていない。
が、それを言われては夫として何も言えない。竜王は再びうなることとなった。どうして妻が猿の肝などというものをほしがるのか、答えを頭で探したが、そんなものは見つかるはずもなかった。
「だいたいお前」竜王は思考を投げ出す。「猿なんてものを見たことがあるのか？」
「あるわけないじゃない」ここは深海よ？　と妃は王を馬鹿にした。
「それなのに、どうしてお前は猿……それもその肝なんていう堅そうでまずそうなものを食べたいなんて言うんだ？」
ふう、と漏れた溜息は妃のものだった。
「子供がね……」妃は大きくなった腹を撫でる。「元気がないのよ。全然動いてくれないの。……ううん、病気ってことはないと思うんだけど、それでもやっぱり母親としては不安なのよ」
顔に憂いが出ていた。それでね、と妃は続ける。
「この子が昨日、話しかけてきたの。猿の肝がほしいって。僕は生まれながらに猿ジャンキーになりたくて、生まれる前に猿をどうしても食べておきたいって。……本当よ？」
妃は真剣な眼差しを竜王に送った。
「嘘だろう」竜王はそれを真摯に受け取った。「バレバレだ」
「やっぱり？」妃は表情を崩す。
「だいたい、さっき子供の調子を尋ねたら、問題ないと返したじゃないか」
「そういえばそういうこともあったわね」遠い目をした妃は言う。
お前のことならなんでもわかる、と竜王は言えなかった。わから

ないことは多々ある。現に今もそうだ。
竜王は大きく息を吐いた。渋ると、王としてまたは夫としての器が知れる。
「猿の肝か。お前がほしいのなら用意しよう」
「本当に？」妃は笑みを浮かべた。
それは、事が自分の思い通りに進んだためのものだった。
「ああ」ぶっきらぼうに竜王は言った。
「うれしいわ」
「心の底から言ってくれ」
「わたし、すごくうれしい！」
「無理させて悪かった」
「がんばったのよ？」妃は顔を赤くして夫を睨んだ。
「それはすまないことを言った」
夫は微笑みを以て謝罪した。

亀がなんとも間の抜けたことを訊き返したのは、それから半刻ばかりたったころである。亀は歯のない口を開けて言った。
「猿……でしゅか？」
急な要件だと竜王に呼び出されてみれば、玉座に座った王はこんなことを訊いた。
お前は猿というのもを知っているか？　と。
亀の訊き返しの無礼を、竜王は叱ることをしなかった。
唐突であることは竜王自身がよく知っている。
「そう、猿だ。知っているか？」
「ええ、存じておりしゅる」亀は緩慢な動作で頷いた。「あれなるものは何とも甲高い鳴き声をしておりましてな、私どもは非常にのんびりしておりましゅるゆえ、その声を聞くたびに身が縮こまるのでございましゅ」
「ほう、それほど甲高い声で鳴くか」竜王は亀に感嘆した。
文献には載っていないことである。亀は万年というのは伊達では

ないらしい。
「して、その猿がいかがいたしましたかな？」
どう説明してよいものか。竜王は少しの間、思案した。
逡巡の末、この老賢者には正直に話した方が早いという結論に至る。
「近く寄れ」竜王は人差し指で亀を招いた。
隠すことでもないのだろうが、それでも大きな声で言いたくはなかった。
「しばしお待ちを」亀はそう言って歩を進める。
亀を近くに至るまで、竜王は気長に耐えた。
「して」暫くたったのち、亀は竜王の口元でつぶやくように言った。
「ご用件とは？」
「実はな、妃のことに繋がるのだが……」
「はあ……」亀はわざと鈍感なふりをした。
聞き手がそうであった方が、話しやすいこともある。
「妃がな……猿の肝を食ってみたいと言い出してな」
妻の評判を落としてはいろいろとまずい。竜王は言葉を選び選び亀に告げた。が、それ以外に的を得た表現が見つからなかった。
「だが」と竜王は続ける。「俺はその猿というものを文献から知ってはいるが、見たことがない。それにこの宮を空けるわけにもいかない。そこでそなたに相談をしようと……」
「はいはい」亀は好々爺の顔で言った。「つまり私めが猿の肝を取ってくればよろしいのでしゅね」
「……頼めるか？」竜王は顔を崩さずに訊いた。
それはその言葉を待っていたからに他ならない。
「もちろんでございましゅ」亀は破顔した顔を絶やさない。「ただ、私には鋭い爪もなければ牙もございません。よって、肝だけ持ち帰るのは無理でございましゅれば、猿を一匹ここに連れてくることで、ご命令に報いるということでよろしいでございましょうか？」
「もちろんだとも」

「ありがとうございましゅ」亀は少し引いて言った。「無能をお許しください」
「いや、お前には感謝せねばなるまい」
「いえいえ。……さすれば、さっそく行ってまいりましゅので」
失礼します、と言いながら、亀はその場から後退していく。
「ああ、頼んだ」竜王は期待を込めて言った。

亀が竜宮の門をくぐろうかというときに、それを引きとめた生物がいた。海月である。このころはまだ骨があった。どころか皮膚もあったので、特徴的な頭によって、一見するだけでは蛸と見分けが付かないところがある。
亀はその方を、目を細くしてみて、ああ海月さん、といった。
「どこか行くのかい？」海月は訊いた。
社交辞令のつもりだったのかもしれない。
「ええ、ちょっと。陸の方に用がありましてな」
「……卵でも産みに行くのかい？」海月は屈託なく笑った。
「私は男ですよ」亀は少しだけ噴き出して笑った。「それに、もう枯れました」
「いや、悪気があったわけではないよ？　ただ海亀のあんたが陸に用があるなんて、単純にそれくらいしか思いつかなかっただけさ。別に秘密でもなんでもないのなら、是非教えてもらいたいな」
こういう性格を場合によっては煙たく思うものもいるだろうが、亀は年長者だけあって、温和な態度を保つ。
「猿をね、連れてくるんでしゅよ」
「サル？　なんだい、それは」海月はどこからどこまであるのかわからない首を傾げた。
亀はそういう動物がいるのだと簡潔に答え、さらにどうして連れてこようとするのかを、海月の先を読んで答えた。
もともと、性癖ともいえる妃の突発病は海の世界では知れ渡っており、いまさら隠すことではなかった。

「また御妃さまは可笑しなことを所望される」海月は目を丸くする。
「あんたも大変だなあ。そんなに生きてもまだ働かにゃいかんのか」
「いえ、こうして長く生きてられるのも竜王さまのおかげでしゅので、役に立てることがあればそれは喜ぶべきものなのでしゅ」
「そういうものかねえ」
「ええ、そういうものでしゅよ」
そう言って亀は軽くお辞儀した。もう行く、という意味だ。
「それでは私はこれで。あまり遅くなるといけませんので」
「ああそうだな」海月もそれに同意した。「それじゃあ気をつけてな。仕事がうまくいったら、王様にもう一度みなぎれるようにお願いするといい」
「はは。そうでしゅなあ」

亀はある海岸に着いた。そのすぐ近くには岩肌を露出した崖があり、大きな松が一本生えていた。
その松に都合よく、猿が一匹腰かけていた。
亀はそのすぐ下まで行き、そこからその猿に話しかけた。どう見ても強そうには思えない猿だった。
「猿さん、猿さん」亀は出来るだけ大きな声を出して呼んだ。
猿はその声に気づいて下を見た。
「なんだ、亀か？」猿は初め、亀には聴こえないようにつぶやいた。
「どうした、何か用か？」
あまりにも亀の声を張り上げる様子が辛そうだったので、猿は崖を下り、水面まで近付いた。
それを待って、亀は真剣な瞳で言った。「猿さん、あなたはここら一帯の主さまであられましゅか？」
少し、沈黙があった。猿は、亀が何を言おうとしているのかを頭の中で咀嚼する。十分噛み砕いたところで、猿は不機嫌さを顔に出した。
「俺のどこを見たらそういう風に見えるんだ？」猿は腕に力瘤を作

る。「見ろ、この細腕。これじゃあどうやったって喧嘩には勝てない。主っていうのは力の強いやつがなるんだよ」
自分では頂点には立てない、とその猿は自暴自棄になっていた。
それを聞いた亀は口を空けて、呆けたような顔になる。
「どうした？」猿は訊いた。
「いや、私は陸のことを存じませんので、海の世界と違う道理が罷り通っておることに驚いておるのでございましゅ」
「どういうことだ？」
「海の世界では、力の強い弱いで国は治められませにゅ」
「……じゃあ、なにで……いやどんなやつが治めるっていうんだ？」
「知恵のある、または賢しいものが治めるのでございましゅ。力のあるなしは、二の次でございましゅ」
「ほう」猿は海のその仕組みに少しだけ感嘆した。「そういうものなのか」
しかし所詮は他人事に過ぎない。
「ですから、聡明そうな見た目のあなた様を見て、主さまか、とお尋ねしたのでございます」
「ふうん、そう」
猿はすでに飽いてしまった。返事さえもおざなりにある。
知恵がありそうとほめられたところで、どうしようもないのである。
「そうでしゅか。陸の世界とはそういうものなのでしゅなあ」亀はやけに大げさに頷いて見せた。
まるで独り言のようである。そして独り言はさらに続く。
「いや、それならば……不都合というものはありませにゅのう。これならば反って好都合……」
「どうしたんだ？」猿はそれが気になった。「何かあったのか？」
「ああ、いやしゅいません」亀は猿の存在を忘れていたような動作をとる。「実はですな、私めがあなた様に話しかけたのにはわけがありまして……」

「いったいどんな？」猿は食いついた。
「実はですな、実は……」亀はもったいつける。
重要なことで、安易に漏らしてはいけないような印象を猿に与えた。
「はやく言え」猿はそれがどうしても気になった。
「実は……」亀の目が据わった。「長いこと海の世界を統治しておられた竜王さまが、先日お亡くなりになられまして……今、海の世界は荒れておるのでございます」
嘘である。嘘は続く。
「しかし今の海には、先代ほどの知恵のあるものがおられませんで、なかなか玉座に就けるものがあらわれませにゅのでしゅ。私は宮仕えでしてな、それが大変悲しゅうございましゅ」
「なるほどな」猿は相槌を打った。
「それで、このままではいけませんでしょう？　でしゅから、別の世界、つまり陸から新しい王さまを迎えて、その者に海を治めてもらおう、と、宮の者全員で決めましてな、私がこうして、それにふさわしい者を探しに参ったのでございましゅ」
「ほうほう」猿は黙って聞いている。
「ただ、私どもは陸の道理をしりませんで、海と同じようなものだと思っておりました。でしゅから、一目見て、聡明そうなあなた様を主だと勘違いしてしまったのでございましゅ」
「ああ……」猿はそれで合点がいった。「いや、なるほど」
容姿から賢そうだということは、これまで一度も言われたことがなかった。いや、あるのは弱そうだと、その一つだけである。
海と陸では価値の方向が違うのである。
「そこで、でありましゅ」亀はより一層深刻な顔をした。「私は初め、主さまを引き抜いて、海を統治していただこうと思っておりましたが、それにはいろいろと問題がありましょう」
主というのは、つまり主である。必要とされているのだから、引き抜くのは容易ではない。

亀は続ける。
「しかし、海と陸でその道理が違うのであれば、考え方によってはそちらの方が都合がよろしく思いましゅ」
必要とされていないものが、別のところで必要とされるのであれば、何も問題はない。適材適所に近いものがある。
「都合がいい……？」
猿はこれまで何も考えずに聞いていた。よって、感じたことなど一つもないが、それでもその言葉がやけに突っ掛かった。
「はい」亀は頷いて、猿の目を見据えた。「先ほどあなた様は、ここでは必要とされてない、ということをおっしゃりましたな」
言っただろうか。
本当のことではある。
「ならば、海に来ていただけませにゅか。私どもの世界には、あなた様を必要としておりましゅ。王様に、なっていただけませにゅか」
猿は、衝撃と言っていい心境を亀に与えられた。
まさか、と思う。
しかし乗らない理由はない。
猿は、一つ返事で頷いた。

亀というのはよく乗り物にされる。今回もそうで、猿は亀に跨ってやってきた。不思議と息苦しくはなかった。周りの風景を見る余裕さえあった。
猿はその風景に対してある種の感動を覚えた。
「ここで暫くおまちください」
竜宮に着くと、その門の前で亀は猿に言った。
猿は周囲を見渡すばかりで、なぜ待たなくてはいけないのかを考える暇はなかった。
「うん」上の空で答える。
亀は門を潜って奥へと行ってしまった。
ここがもうすぐ自分のものになる。それは本当か？　猿は未だ実

感が湧かないでいる。
もっとも、なるはずがない。
二、三分が経ったころ、突然猿は後ろから声をかけられた。
「おい」
後ろを振り向くと、何とも奇怪な生物がすぐ近くにいた。
海月である。
その海月は言う。
「お前が猿か？」顔がにやけていた。「すげえな、毛むくじゃらだ」
「確かに俺は猿だが……」猿は、賢さをアピールするつもりで胸を張る。「君は誰かな？」
「俺？　俺は海月っていうんだ」
「なるほど、海月君か」深々と頷いた。「よし、よく記憶しておこう」
海月は亀から事情を聞いている。だから、その猿の動作が可笑しくてたまらない。
「どうした？」猿は少し機嫌を損ねた。「なぜ笑う？」
笑いながら海月は答えた。
「いや、これから死ぬようなやつに名前を憶えられてもしかたがない、と思っただけさ」
猿は怪訝な顔つきになった。
「死ぬ？　俺は王様が死んだから、その地位を継ぐために来たんだろ？」
「はあ？」海月は眉を寄せ、また笑いだした。「亀の爺さんがなんて言ってお前を連れてきたのかは知らないが」
そう、海月は知らないのだ。
「竜王さまは今もご健在でおられるよ」
それを聞いた猿はだいぶ混乱した。
海月はますます愉快になる。
「かわいそうだから教えてやるよ。今もご健在な竜王さまには妃さまがおられてな、こう言いなさったのさ」海月は得意な顔をする。

「猿の肝が食べてみたい、てな。もともと変なことを突然言い出す人柄ではあるけどよ、まあ今回もそうだったんだろうな。で、竜王さまは猿を見たことなんてないから、亀の爺さんに頼んだんだと。猿の肝をとってこいって。だが爺さん、爪も牙もないから、連れてくることしかできない。だから、猿、あんたをここまで連れてきたのさ」

海月は洗いざらい喋ってしまった。

猿の顔色はだんだんと青くなる。

「それは本当か？」震える声で訊いた。

「嘘なんか吐くかよ」海月は自信満々に答えた。「ま、運がなかったと思ってあきらめな。ここはもう海、陸じゃねえんだからよ」

海月は猿の肩を叩くと、どこかへ行ってしまった。

物見遊山もいいところである。

猿はその後ろ姿をまじまじと見つめた。

それから半刻して、亀が戻ってきた。泳いでいないので驚くべきほど遅い歩調である。

猿にはそれが死神のように見えたに違いない。

「よう」猿はなんとか声を絞り出した。「おそかったじゃないか」

そう言われると、亀は深々と頭を下げた。

「申し訳ございません。何かと準備もありまして」

準備とは一体何だろう。猿は戦慄を持って考える。

「それでは、参りましょう」亀は門の中へと誘った。

「あ……いや……」当然のことながら、猿はそれを受け入れることができない。

「どうなされましたかな」亀は温和な顔で訊いた。

「あ……いや、その……忘れ物をしたんだ。……陸に」

自分でも苦しい言い訳だと思った。

「お気になさらじゅに」亀はどうでもよさげに表情を崩さない。

その亀の言い分はこうだった。

「あなた様は直にこの海の王様になられるのですから、その忘れ物というもののことさえ忘れましょう」
「ああいやいや」それを猿は首を振って否定した。「ないと困るものなんだ。あれがないと、俺は生きていけない」
あまりに猿が慌てるものだから、亀は首を傾げつつも、何を忘れたのかを訊いた。いや、訊いてやった、という方が正しいか。
「いったい、何を忘れたのでしゅ？」
「その……」猿はなんと言ったものか考える。「大変言いにくいことなんだが……」
亀は先に続く言葉を待った。
猿にはそれがありがたかった。
「自分の……肝を忘れてきてしまった」
「なんと！」亀は今までの表情をついに崩した。
目と口を見開いたその顔に、猿はなんとか驚きを心の内のみに堪える。
「陸の生物とは肝を外に外せるのですか……」亀は言った。
海の世界で、肝を持つ生物とは稀である。魚類をはじめ、そのような器官をもたない生物が大半なのだ。
陸と海では世界が違う。だから、あり得ない嘘でも罷り通ってしまうのである。
「まあ……」猿はその嘘を補強すべく口を開く。「俺は情けない話、小心者でな。放っておくとすぐに肝が縮こまっちまうんだ。だから、天気のいい日は干しとくようにしていたんだが、それをうっかり忘れていた。そろそろもとに戻さないと、俺は直に死んでしまう」
「それは……大変なことでしゅ」亀は大いに慌てている。
別に猿が死のうとどうでもいいことである。むしろ肝を持っていない猿など、実にどうでもいい。死んだって構わない。
だが肝は別だ。肝だけに用がある。
その肝が、今はない。
「取りに戻ってもいいか？」

呆けていた亀に向けられた言葉が、亀には名案に思えて仕方がなかった。
ないのならば、取りに戻ればいいのである。
「え、ええ。急いで取りに戻りましょう」
亀はすぐさま、猿を甲羅に乗せた。

竜宮へ行った時間の三分の二ほどの時間を使って、猿と亀は海上に出た。それほど亀が急いだためと言える。
「どこですかな？」亀は息も絶え絶え、猿に訊いた。
「あの崖の上に干した」猿は顔に喜びを出しながら指をさす。
最初に出会った崖であった。もう日も暮れ始めて、色はまったく違っている。
猿の顔を亀は知らない。甲羅に乗せている間は、その者の顔は見えないのである。
「もっと近づいてくれ」猿は言う。「そうすれば、崖を上ってとってくる」
「はい。お早くお願いしましゅよ」
竜王を待たせている。事情を話してから来るべきだった、と亀は思ったがもう遅い。
その顔に好々爺の顔はもうなかった。
崖に着いた。
「さあ、お早く。皆待っておりましゅる」
「おう、任せとけ」猿は亀から飛び降りた。「……てなあ、嘘だ」
「は？」
「俺の肝は、最初からここにある」猿は自分の胸を叩いた。「騙して悪かったな。でも、お互い様だぜ。まあ、いいもの見られたから許してやるよ」
「何の……ことでしゅ？」亀は、猿の言わんとしていることを飲み込めない。
「海月のやつに聞いたんだ。あんたがなぜ俺を竜宮に連れて行った

のか、っていう本当の理由をよ」
亀の脳内で、海月との会話がフラッシュバックした。
海月のやつ……。もう、遅かった。
「海月によ、ありがとよって言っといてくれな」崖を登りながら、猿は言った。「あばよ」
もう連れ戻すことは不可能である。
亀は暫く、茫然と崖の向こうを眺めていた。

王の間へと亀はやってきた。
「あまりにも遅いじゃないか」王は言った。
亀は生きた心地がしていない。口が意味もなく震えている。
「申し訳ございません」亀は玉座の前で額を床につけた。
「どうした？」王は訝しんで訊く。「ここに連れてきたのだろう？」
「それが……連れてきたは連れてきたのですが、その……」言い淀んだ。「逃げられてしまいました。
「逃げられた？」竜王はより一層、彫を深くした。「なぜだ、理由を述べよ」
亀は言葉を選び、とつとつと今までの出来事を話した。
自分は最善と思われることをした。ただ、失策がひとつ。全ては海月に世間話をとしてしまったことが原因だった。
亀は竜王を怒らせることを恐れた。いったいどれほどの累が及ぶか、わからない。滅多なことでは逆鱗に触れずとも、触れてしまえば天変地異もいいところなのだ。
そんな亀を余所に、竜王は内心で落胆した。妃の願いを叶えられなかったからだ。
どう言い訳をしようか、それを考えていた。
が、突如として、それは少しの驚きとともに霧散した。
「客観的に見ると、原因は海月よね」
声を発したのは妃だった。妃が奥から姿を現したのだ。
その妃は続ける。

「まあ亀、あなたはよくやってくれたと思うわ。その話が本当ならね」
「本当でございましゅ」亀は悲痛な顔をした。
「なら、それでいいわ。この人はこんなことじゃあ怒らないから大丈夫、そんなに怯えないで。あなたはよくやったわ、私が保証してあげる。世間話程度で曝露してしまうって、案外口が軽いのね、ってそう思っただけ」
「しゅいませんでございましゅ」
「ええ、それもいいわ。許してあげる」
体に障るだろうと、竜王は妃を玉座へと誘ったが、妃はそれを辞した。
「でも」妃はなおも続けた。「今回のことに関して、阿呆がひとりいるわね。亀、そいつをここに連れてきなさい。それが終わったら、あなたはもう行っていいわ」
「は……」亀は海月を連れてこいと言っていると理解するのに、数秒かかった。「はい」
亀はそういうと退座した。

それから、海月には罰が下った。建前は竜王が下したことになっているが、真偽は定かではない。
罰というのは、まず門番の解雇。それから、周知の事実である、骨を抜くということ、それから、皮膚を剥ぐということ。亀のお咎めなしという処分に比べ、ずいぶんと惨い。口は災いのもとというが、そういうことだろうか。
そのことがあって、それから海月は地に足がつかず、ただふらふらと、海中を浮遊することしかできなくなった。
竜王はその骨と皮を保管して、暫くしたら返してやろうという考えでいた。保管を依頼したのは妃だった。
しかし、それらはいつの間にか紛失してしまっていて、この話は竜王の頭の中だけで終わってしまった。

何年かしたのち、竜王は妃に訊く機会があったが、妃は思い出したように言った。
「ああ、あれね。うーん、忘れたわ」
いったい何を忘れたのだろう、と竜王は思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1716o/

海月骨なし

2010年10月8日11時12分発行